名古屋芸術大学キャリアセンター紀要　第10号　175〜183頁（2021）

中学校美術科の題材研究「360 度の世界」（I）
―中学校での授業実践を通して―

Reseach on the Art Department at Junior High Schools " 360 Degree World " (I)
― Through Class Practice at Junior High Schools ―

松實　輝彦　*MATSUMI Teruhiko*

1. はじめに

本稿の表題にある「360 度の世界」は、かつて筆者が非常勤講師として勤務していた私立中学校の美術科の授業で実践した題材名である。中学校学習指導要領の「A 表現」領域の絵や彫刻などに表す活動における「描く活動」に相当するもので、筆者が独自に考案し実施した絵画（水彩画）の題材であり、中学 3 年生を対象に取り組んだものである。

その後、しばらくの時間を経た現在、本学の教員である筆者は、美術科の教員免許取得を希望する美術領域およびデザイン領域の学生を対象とする教職科目の「美術科指導法」を担当しており、その授業のなかであらためてこの題材を扱う機会を得ることになる。

このふたつの事象は時間的にもかなりの開きがあり、実践した場所も対象者も各々異なる活動ではあるが、それゆえにいくつかの興味深い事柄に気づくことのできた取り組みとなった。

ただし、この一連の題材を考察するにあたっては紙幅に限りがあるため、中学校および大学での実践について一括で記載することはかなわず、分載というかたちをとることとなった。本稿では時系列的に最初に実践した中学校での題材「360 度の世界」の取り組みについて、当時の記録資料等をもとに考察をおこなっていくこととする。大学での実践についてはその後に稿をあらためて論じていくこととしたい。

2. アート表現としての 360 度の絵画

まず授業実践にいたる前段階として、「360 度の世界」という題材を考案することになった契機についてここで簡潔ではあるが触れておきたい。筆者がこの題材をイメージするきっかけとなった事柄のひとつは、当時の美術雑誌に掲載された小さな記事を見たことであった。具体的に記せば、『芸術新潮』2004 年 6 月号内の展覧会紹介「スターダスト」欄に掲載された、「橋本典久の虚景 360 度」と題され写真図版 1 点が付された無記名のレヴュー記事である。

橋本典久（1973 －）は愛知県瀬戸市出身の写真家、メディア・アーティストである。1996 年に全方位画像を球体表面に貼り付けた「パノラマボール」を発表し、1999 年には全方位画像が写った円形の平面画像である「ゼログラフ」を発表している。筆者は不勉強のためそれら当時の活動を知ることはなく、2004 年にNTT インターコミュニケーション・センターで開催された「ネクスト：メディア・アートの新世代」展に出展された橋本作品

についての、同誌による紹介記事ではじめて関心を抱いたのである。以下にその記事を全文引用し、同誌に付された作品図版（図1）を掲載する。

真ん中の丸いのはバスケットボール？　実はこれ、展覧会場の四角い床面なのだ。橋本典久（1973年生れ）は、ある光景を魚眼レンズで3～6枚ほど写真に撮り、コンピュータで補正しつつ繋いでゆく。地球儀みたいに球体に貼ったタイプが「パノラマボール」で、それを地図でいう正距方位図法で平面に展開してみせたのがこの「ゼログラフ」である。どちらも天地左右360度を丸ごと収めるという点ではスーパーリアルだが、空間が反転したような奇妙な感覚は肉眼では決して体験しえないアンリアル。「メディア・アートの新世代」をうたう展覧会で、動きもせず音もしない、だがもっともラディカルな作品だった。（註1）

図1
橋本典久
《ゼログラフ［ICCギャラリー　A20040330-D］》 2004年
ラムダプリント、ステンレス　直径310cm
『芸術新潮』2004年6月号より転載

筆者はその後も、継続的にアート表現としての360度の平面作品はないものかと関心を持ちながら過ごしていた。しばらくすると日本画の表現で同様の円形による作例が見受けられた。日本画家・末永敏明による《Eine Welt》と題された作品である。

末永敏明（1964－）は神奈川県出身の日本画家である。東京藝術大学大学院日本画専攻を修了し、現在は東北芸術工科大学教授として後進の指導にあたっている。自身の作家活動としては、グローバルな視点から日本画における新たな絵画表現に携わっており、そのテーマは「マクロコスモスおよびミクロコスモスの生成」である。末永が2000年代初頭の作品制作にあたって、自ら記したコメントを以下に全文引用し、その作品図版（図2）を掲載する。

宇宙では万物の遊離と結合が繰り返されている。結合された生成の大きさによって、惑星や隕石や塵になり、それらは宙に浮遊する。かつて夏の北極圏で一日中沈まぬ太陽の下、私は足元から延々と広がる鉱物が織り成す360度のパノラマの中にいた。気の遠くなるほど数々の偶然が重なり、宙に浮遊するものが集まって出来上がった風景である。（註2）

図2　末永敏明《Eine Welt》
2003年　綿布、岩絵の具、ピグメント、箔　直径130㎝
『東北芸術工科大学紀要』第13号より転載

メディア・アーティストと日本画家の双方がほぼ同時期に制作・発表した円形の平面作品は、どちらも物質的なスケール感を伴いながら独自の世界観が美的に表現されたものであり、ともにアート作品として十分に興味深いものであることは理解された。

ただし、これらの作品を中学生たちに授業を通して丁寧に鑑賞させたとしても、十分な理解が得られるかどうかについての不安はあった。はたして生徒たちは自らの造形活動として、上記アーティスト同様の表現を生き生きと主体的におこなえるだろうか。逡巡は続き、筆者は生徒たちへの活動の実施を躊躇した。そしてしばらく悩んだ結果、やはり難しいと判断するにいたった。もっと中学生たちの生活環境に寄り添った、より身近で親しみのある具体的な参照事例が必要だと思われ、その実践はいましばらくペンディングとしたのである。

3. 駅構内に貼りだされたポスター《海、山、空、ANA》

その当時、筆者は兵庫県の神戸市内に居住しており、日々の通勤手段としては神戸市営地下鉄を利用していた。三宮駅で地下鉄からJRに乗り換えて、勤務先である私立中学校のある西宮市内へと通勤していたのである。そんな2006年2月のある朝、地下鉄・三宮駅構内の通路にずらりと一斉に並んで貼りだされたポスターに思わず目を奪われた。

それは神戸ポートアイランド沖に近々開港することとなる神戸空港に、ANA（全日本空輸株式会社）の旅客機が就航することを伝える大型のポスター《海、山、空、ANA》（図3）が並ぶ壮観な光景だった。そして一見することで、そのポスターこそが題材「360度の世界」の実践にあたって、生徒たちに「より身近で親しみのある具体的な参照事例」になるものだと直感したのである。

早速その日の帰宅時に筆者は地下鉄・三宮駅の駅長室を訪れて、勤務している中学校での美術の授業の教材として活用したいので、掲示期間終了の際には是非ポスターを1枚譲ってほしいと願い出た。駅長はこの唐突な申し出に対して実に寛容な態度で十分な理解を示され、一定期間後のポスター撤去時にはあらためて連絡をいただくことになった。こうして幸いにも筆者は当該ポスターを譲り受けることが出来たのである。

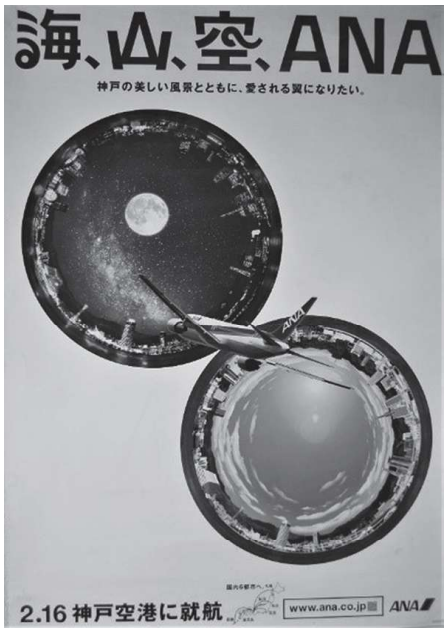

図３　ポスター《海、山、空、ANA》
2006 年　72.8 × 103㎝
筆者所蔵

このポスターは横幅が 72.8㎝、縦幅が 103㎝あり、B1（またはＢ全とも呼ばれる）サイズである。一般的に人通りの多い街中の掲示スペースや駅構内の通路等で使用されるものである。このポスターの具体的な制作者については不詳だが、そのデザインに目を向けると、上部に大きく見出しのコピーが打たれ、「海、山、空」の漢字にはその一部に象形文字的な加工が施されている。メインコピーの下には小さなポイント活字で「神戸の美しい風景とともに、愛される翼になりたい。」とあり、最下部には「2.16 神戸空港に就航」とある。2006 年 2 月 16 日、神戸ポートアイランドの南沖に位置する人工島に開港した神戸空港に、ANA が札幌・仙台・新潟・羽田・鹿児島・那覇の国内 6 都市に就航することを伝えるポスターである。だが、なによりも目を惹くのは、ポスターの大部分の空間を占める魚眼レンズによって撮影された 360 度のふたつの写真である。

六甲山系とその上の広がる空を背景に、神戸港内の海側から三宮・元町にかけての賑やかな商業空間が撮影され、メリケンパーク、ポートタワー、オリエンタルホテル、モザイクといった商業施設がその円形の平面空間に精緻に点綴されている。レンズの位置はそのままに夜景と昼景が上下に配され、そのあいだを ANA の旅客機がかすがいのように繋いでいる。

ふたつの全方位画像からなる円形写真とメインコピーがフィットしており、ポスターとしても実に明快でわかりやすいイメージとなっている。そして勤務先の中学生たちの大部分が神戸やその近隣の西宮、宝塚、尼崎といった阪神間の各地域に居住していることもあり、その地域最大の繁華街である三宮と元町の街並みは、生徒たちにとっても大いになじみ深い生活空間である。よってこのポスターこそが初発のアイデアのままでペンディングしていた「360 度の世界」という題材の、授業実践における導入部で使用するにあたって、もっとも相応しい視覚教材になり得るという確信を持つにいたったのである。

4. 中学校における題材「360 度の世界」の実践事例

筆者がこの題材での授業を実施したのは、兵庫県西宮市に位置する中・高一貫制の私立女子学校の中学 3 年生のクラスである。絵画制作の材料には、これまでも生徒たちがよく扱ってきた四つ切の白画用紙（38 × 54㎝）を使用した。その画面内に過不足なく収まるようにコンパスで正円を描いたものを切り取り、それを型紙として画用紙にトレースすることで必要な人数分の材料を準備した。

授業の導入では、地下鉄・三宮駅から譲り受けたANAのポスターを黒板に掲示して、生徒たち各々にそれを見た感想を発表させた。筆者が最初にこの題材のイメージを得たメディア・アーティストの橋本典久や日本画家の末永敏明の作例を示すことは、かえって生徒たちにイメージの分散や不要な混乱を与えてしまう危惧があると判断したので、導入にあたっての視覚教材はANAのポスターのみとした。生徒たちは実際のB1サイズのポスターを間近に見ることで大いに興味・関心を示し、魚眼レンズで精緻に撮影された円形写真をそれぞれ指差しながら様々な感想を述べた。

描画活動にあたっての教師側からの指示は次の 3 点だった。

① ポスターはあくまで参考にとどめて、画用紙に記された正円内には自分だけの不思議で愉快な「360 度の世界」を自由に発想すること。

② 円周上が地平線（または水平線）だとすると、円の中心に向かうほどにどんどん高く（または深く）なっていくこと。

③ クロッキー帳にアイデアスケッチをしてから画用紙に鉛筆で下描きを施し、水彩絵の具で彩色して仕上げること。

生徒たちからはポスター以外にも参考となる図像資料が見たいとの声が上がったので、美術室の階下にある図書室での調べ学習を許可した。生徒たちは図書室内の様々な地図帳や各種の図鑑類を参照しながら、思い思いに自らの「360 度の世界」のイメージを構築していった。

その後、生徒たちの活動は一様に水彩絵の具による彩色段階に入っていったが、そこで再び生徒側から声が上がった。画用紙の正円外の部分が白地のままだと気に入らない、というのである。実際のところ、授業者としては彩色された円形のイメージ外の、いわゆる地（＝背景）に相当する四隅周辺の箇所については、白地のままでも特に問題はないと考えていた。そこで生徒たちに「では、どうしたい？」と返すと、彼女たちは彩色した円形部分を切り取って、自分で選んだ好みの色画用紙の上に貼り付けたいと申し出たのである。それは教師側が想定していなかった意見ではあったが、積極的な発想であり、色画用紙についても十分なストックはあったので、新たな支持体としての使用を認めることにした。

こうして中学 3 年生を対象にした美術科の題材「360 度の世界」は完成した。それでは一部ではあるが以下にいくつかの作品図版を掲げて、生徒たちのこの題材に対するイメージの一端を紹介してみたい。

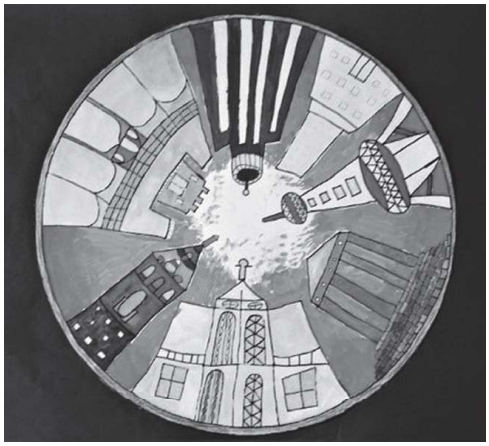

図４　生徒Ａによる作品

生徒Ａは円周上を地面に見立て、画面の中央に向かって高くそびえ立つ多様な建造物を描いている。（図４）このようにいくつもの建造物を円内にぐるりと並べて描くというアイデアは、もっとも多くの生徒たちが試みた表現による作例パターンであった。そのなかでも生徒Ａは神殿の遺構や教会や尖塔といった、それぞれ世界中に点在している有名な建造物が一堂に会するという、現実にはありえない場面を独自に編集／構成し、丁寧に彩色して仕上げた。

また、モノクロの図版では判りにくいが、建造物の背景には夕焼け空をイメージしたオレンジ色のグラデーションが施されており、円外の支持体には紺色の色画用紙が選ばれている。全体を通しての色彩の対比効果も考慮された作例である。

図５　生徒Ｂによる作品

生徒Ｂによる作品にも画面内に建造物は多く見られるのだが、さきの生徒Ａの作品と比べてみると、その差異は明らかである。（図５）生徒の多くは円周部にあたる地上部分を、自然な大地の茶褐色あるいはアスファルト舗装の灰褐色に彩色していたが、生徒Ｂはその箇所を薄紫色にしている。作品をよく見ると、その理由が理解できる。画面内には富士山が大きく描かれており、その富士の裾野が円周部を覆っているというユニークな発想である。

富士の裾野からはフランスの凱旋門やオランダの風車小屋、イギリスのストーンヘンジといった世界各国の著名な建造物や歴史的遺構が屹立している。さらに日本のこけしやロシアのマトリョーシカといった本来は小さな土産用の工芸品が、建造物と同等の巨大なスケールに拡大されて肩を並べるように同一空間に描かれている点もたいへんユニークである。全体を通して生徒Ｂならではの、「不思議で愉快な」作品観が十分に発揮された作例といえよう。

彼女は円内の背景に彩色した爽やかな青空との色彩対比を考えて、円外の支持体には朱赤色の色画用紙を選んでいる。また、作品の中央部には地上から真上に向かって見上げた視点による飛行機の胴体底部が描き込まれている。おそらくそのイメージの発想源は、授業の導入部で見たANAのポスターに求められるものであろう。

図６　生徒Ｃによる作品

生徒Ｃによる作品は他の生徒たちの作品傾向とは異なっており、海のなかに深く潜りそこから振り仰ぐ視点を設定している点で、そのユニークさは際立っている。（図６）そこは豊かな海なのであろう、海底からの全方位による画像には多くの多様な海洋生物たちの姿が認められる。

海底付近の岩場にはタコやエビやカニ。サンゴの陰にはホタテ貝とおぼしき大きな二枚貝。揺らめくコンブの林にはイカ。海の中層にはアジなのかサバなのか不詳だが、小型の魚たちが群れ泳いでいる。その群れの近くには白い腹をくねらせるようにサメが遊泳している。ひょっとするとサメは小魚たちを狙っているのかもしれない。さらにその表層では、大きなマンタ（イトマキエイ）が優雅に舞い泳いでいる。

生徒Ｃは理科が得意科目であり、海の生物の生態についてもたいそう詳しい様子であった。だが単に知識があるだけではなく、それらの生物が海中で生き生きと活動している姿を図像として巧緻に形象化している点が素晴らしい。これもモノクロの図版では判りにくいことではあるが、海流に合わせて揺れるコンブの色彩表現は見事である。また、海底から表層の海水面へといたる距離感が、青色のグラデーションと魚の大小の形象によって巧みに表現されている。さらに海水面から海中に差し込む太陽光線を白色のラインの向きや長短でさり気なく示す技能等、その描画技術はクラスのなかでも卓越したレベルに達している。

彼女は円外の支持体には群青色の色画用紙を選択した。より深いトーンの同系色を周囲に配することで、豊かな海の「360度の世界」を見るものに集中して楽しんでもらいたいという明確な意図が、そこにはうかがえるのである。

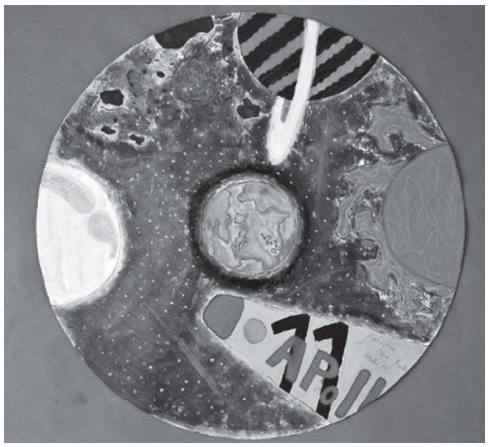

図７　生徒Ｄによる作品

生徒Ｄの作品は地球から飛び出して、遥か彼方の宇宙空間から垣間見た「360度の世界」である。（図７）円内の中心部には日本列島の示された地球が、銀河系の視点から堂々と描かれている。地球の右方向に存在しているのは、赤く燃え盛って激しくコロナを放電している様子から太陽だと思われる。その上方にある黒色とオレンジ色の縞模様のかなり派手な星は、赤道周囲に特徴的な大きな環があることから、土星だと判断される。地球の左方向で黄色に輝いている星は、「明星」の異名を

もつ金星なのだろうか。そして地球の下方には「アポロ 11 号」の機体の一部が描かれているようだ。もしこれがアメリカの月面探査計画で人類初の月面着陸に成功した宇宙船アポロ 11 号だとすると、左側の輝いている星は月ということになる。そうなるとこの画面の時代設定は 1969 年ということになる。しかしながら、実際の歴史年表などには構うことなく、生徒Ｄは宇宙空間をテーマに自由な発想から浮かんだアイデアを描画活動へと熱心に取り組んだ。これまで見てきた作例と同様に、この作品からも生徒が楽しみながら生き生きと制作活動をした様子が伝わってくる。

生徒Ｄはクラブ活動では剣道部の主将を務めており、クラスの委員長でもあった。いつも明朗で快活な頼もしいリーダーである。そんな彼女の元気いっぱいな力強さがこの作品には満ち溢れているともいえよう。だが、そのパワフルさというのは暴君のような無鉄砲さではなく、丁寧な仕事の積み重ねによって支えられていることも確かな事柄である。それは宇宙空間に数多きらめく星々を様々な色調の点描で塗り分けている場面や、土星の脇で小惑星が爆発と生成を繰り返す様子についても粘り強く工夫を凝らして描き上げている場面等からも十分に了解されるのである。

生徒Ｄは円外の支持体に明るいターコイズブルーの色画用紙を選んだ。じめじめした雰囲気を好まずカラッとした物事を好む、そんな明るい性格の彼女らしいセレクトだと思われた。

5. おわりに

筆者が中学生に指導した美術科の題材「360 度の世界」について、いくつかの具体的な作例をピックアップしながら振り返ってみた。思春期の渦中にあって様々な事柄に思い悩むことの多い中学３年生を対象としたのであるが、この題材は魚眼レンズというやや特異な視点を参照して、日頃の見慣れた視点から距離を置くことで新たな美術的（美的）発想の獲得を目指したものであった。視点を変える力をもつこと、多様な視野を使用可能な状態に準備しておくことは、思春期ならびにそれ以降の青年期を生きるにあたって、何かしらの有益性はあると考えたからである。

授業をおこなうにあたって生徒たちの発想を広げること／広げさせることは、けっして容易なことではない。前述したように筆者はこの題材の実施を躊躇し、しばらくペンディングしていた。もし、地下鉄・三宮駅構内に貼りだされたANAのポスターに出会わなければ、「導入に難あり」ということで生徒たちへの授業実践にはいたらないままだったかもしれない。

どの教科にもいえることではあるが、こと美術科にとって「発想を広げること／広げさせること」をめぐっての視覚教材や参考資料の重要性は他言を俟たない。現役の公立中学校の美術教諭である田中真二朗氏はその著書のなかで、美術科における発想に関して「（発想を）広げる際に必要なものは、生徒のもつ引き出しです。様々な体験や経験、鑑賞など

によるインプットがなければ何も思い付きません」として、次のような提言をおこなっている。

教師側が環境を整え、生徒がやるべきことを理解していればこの発想の時間というものはフリーにしてもいいのではないかと考えています。順番どおりに思考させるワークシートで一斉指導してもなかなか出てこない生徒もいます。「あ！　思い付いた！」とか「いいこと考えた！」というつぶやきがいろんなところで聞こえる状態をつくりたいものです。鑑賞用資料を眺めてみたり、友達と話したり、様々な関りを通して発想を広げさせることを楽しんでほしいというのが私の考えです。(註 3)

筆者が中学生と接していた時期はすでに十年ひと昔といったところである。「発想を広げること／広げさせること」ひとつを挙げてみても、当時の筆者には上に引いたような明快で溌溂とした考えは乏しいものであった。

現在、中学校教育の現場で主力となっている教師たちやさらに若い世代の教師たちが、この溌溂とした考えを共有して生徒たちと接するならば、それは教師と生徒の双方にとってもたいそう有意義なことだと思われる。

では、教職を希望する大学生たちへの指導についてはどうであろうか。筆者にとってはそのことが、次の課題となってこよう。ただし、紙幅も尽きてきたので本稿はここまでとしたい。大学生への題材を通しての関りについては、また次の機会に稿をあらためて述べていくこととする。

註

(1)「橋本典久の虚景 360 度 「ネクスト：メディア・アートの新世代」展より」、『芸術新潮』2004 年 6 月号、新潮社、122 頁。

(2) 末永敏明、他 5 名「BANDED BLUE を通して見た日本画」、『東北芸術工科大学紀要』第 13 号、東北芸術工科大学、2006 年、16 頁。

(3) 田中真二朗『造形的な見方・考え方を働かせる　中学校美術題材＆授業プラン 36』、明治図書出版株式会社、2019 年、13 頁。